

ルカの福音書 71回

弟子の代価

14：25～35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ13：18から、中心テーマが「神の国」に変わった。
- ③神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

(2) ルカ13：18～14：35の内容

- ①神の国のたとえ話（13：18～21）
- ②神の国への入国（13：22～30）
- ③神の国の延期（13：31～35）
- ④食卓での諸々の教え（14：1～24）
- ⑤弟子の代価（14：25～35）

(3) 注目すべき点

- ①食卓での諸々の教えのテーマは、「神の国への招待」であった。
 - *その招待を受け入れれば、誰でも神の国に入ることができる。
- ②ここでのテーマは、「弟子の代価」である。
 - *主イエスの弟子となるためには、犠牲が伴う。
- ③バランスの取れた理解が必要である。
 - *救いは無代価であるが、弟子となるためには犠牲が伴う。

2. アウトライン

- (1) 弟子となるための条件（25～27節）
- (2) 塔を建てる人のたとえ話（28～30節）
- (3) 戦いに備える王のたとえ話（31～33節）
- (4) まとめ（34～35節）

3. 結論

- (1) 1コリ3：11～15
- (2) マタ27：39～40

弟子の代価について学ぶ。

I. 弟子となるための条件 (25～27節)

1. 25節

Luk 14:25 さて、大勢の群衆がイエスと一緒に歩いていたが、イエスは振り向いて彼らに言われた。

(1) 前回の教えの舞台は食卓であったが、ここでは異なった舞台設定が用意される。

- ①イエスはエルサレムに向って旅をしている。
- ②大勢の群衆がイエスといっしょに歩いていた。
- ③そこには、弟子とそうでない者が混じっていた。
 - *興味本位の人たちがいた。
 - *イエスの奉仕から益を得ようとしている人たちもいた。
 - *彼らは、イエスから学ぼうとしていたわけではない。
- ④教会が抱える問題は、信者はいても、弟子が少ないということである。

(2) イエスは、振り向いて彼らに言われた。

- ①イエスは、弟子となるための2つの条件を教える。
- ②「弟子の代価」に関しては、9:57～62ですでに語られていた。
- ③この文脈では、神の国の成就を前提に、「弟子の代価」が教えられる。

2. 26節

Luk 14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。

(1) 条件1: 家族関係や自分自身を優先させない。

- ①ここでの「憎む」ということばは、ヘブル的誇張法である。
 - *このことばは、感情的な状態を意味しない。
 - *家族を憎むことは、律法違反である。
 - *このことばは、優先させないという意味である。
- ②イエスは自己愛の重要性を教えた (ルカ 10:27)。

Luk 10:27 すると彼は答えた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

③ヘブル的誇張法の例 (創 29:31)

Gen 29:31 【主】はレアが嫌われているのを見て、彼女の胎を開かれたが、ラケルは不妊の女であった。

3. 27節

Luk 14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

- (1) 条件2：犠牲を払ってイエスに従う。
 - ①イエスの弟子は、イエスが経験したような辱めや試練に遭う。
 - ②イエスの弟子は、イエスがされたように、死に至るまで忠実に歩む。
 - ③ローマ時代、公に辱めを与えるために、十字架を負わせた。

- (2) ルカは、マタイよりも詳しくこの教えを記録している。
 - ①ルカは、異邦人読者を意識しながら書いている。
 - ②迫害を視野に、異邦人信者により大きな励ましを与えようとしている。

- (3) イエスは、弟子の心構えを教えるために、2つのたとえ話を語る。
 - ①塔を建てる人のたとえ話
 - ②戦いに備える王のたとえ話

II. 塔を建てる人のたとえ話 (28～30節)

1. 28節

Luk 14:28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人はいらっしゃいますか。

- (1) イエスは、弟子になることを考えている人たちに語りかけた。
 - ①目的は、弟子になることを思いとどまらせることではない。
 - ②よく考えてから決断せよという励ましを与えることである。
 - ③2つの前提がある。
 - *信仰によって救われたなら、その救いが取り消されることはない。
 - *弟子としての生活を初めても、途中でそれを放棄する可能性はある。

- (2) 塔を建てる人のたとえ話
 - ①ある人が、農地に塔を建てようとしている。
 - ②群衆の中には多くの農夫がいたので、このたとえ話はよく理解できた。
 - ③その場合、工事を始める前に費用を計算する必要がある。

2. 29～30節

Luk 14:29 計算しないと、土台を据えただけで完成できず、見ていた人たちはみなその人を嘲って、

Luk 14:30 『この人は建て始めたのに、完成できなかった』と言うでしょう。

- (1) 費用を計算しないなら、土台を据えただけで終わる。
 - ①群衆の中には、そういう例をいくつか見てきた者たちもいたことであろう。
- (2) その場合、その人は、見ていた人たちから軽蔑されることになる。
 - ①誇り高き中東文化のもとでは、あざけりを受けることは、社会的死を意味する。

III. 戦いに備える王のとえ話 (31～33 節)

1. 31 節

Luk 14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようと出て行くときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうか、まず座ってよく考えないでしょうか。

- (1) このたとえ話も、費用計算の重要性を教えている。
 - ①この場合は、肉体的死にかかわる問題である。
 - ②群衆は、容易に自らを王の立場に置くことができた。
- (2) 2万人の敵が向って来る。
 - ①自軍には1万人しかいない。
 - ②戦いに勝てるかどうかを慎重に吟味するのは、当然のことである。

2. 32 節

Luk 14:32 もしできないと思えば、敵はまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和の条件を尋ねるでしょう。

- (1) 勝てないと思えば、別の方法を考える。
 - ①敵が遠くにいる間に、和平交渉を開始する。
 - ②これは、しっかりと費用を計算した結果出した結論である。
- (2) イエスは、弟子になることを止めさせようとしているのではない。
 - ①幼稚な状態ではなく、深い理解をもって弟子になることを勧めたのである。
 - ②弟子は、ピクニックではなく、霊的戦いに招かれている。

3. 33 節

Luk 14:33 そういうわけで、自分の財産すべてを捨てなければ、あなたがたはだれも、わたしの弟子になることはできません。

- (1) ここで、2つのたとえ話の適用が語られる。

- ①「自分の財産すべてを捨てなければ」とは、どういう意味なのか。
 - *12弟子たちも、多少の財産は持っていた。
 - *それゆえ、これは誇張法と理解すべきである。
- ②弟子になるためには、物質主義から解放される必要があるということである。
 - *12弟子たちは、それを実行していた。
 - *イエスは、財産管理の重要性について教えておられる（ルカ 16：1～12）。
- ③信者になることと、弟子になることは、別の問題である。
 - *誰もが、福音を信じれば信者になることができる。
 - *弟子になれるのは、犠牲を払う人だけである。

IV. まとめ (34～35 節)

1. 34～35 節

Luk 14:34 塩は良いものです。しかし、もし塩が塩気をなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。

Luk 14:35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられます。聞く耳のある者は聞きなさい。」

- (1) イエスは、弟子を塩にたとえる。
 - ①当時、塩は貴重品であった。
 - ②特に、調味料や腐敗防止剤として用いられた。
 - ③当時の塩は、岩塩であった。
 - ④時間の経過とともに、岩塩は塩分を失い、残渣物だけになる。
 - ⑤そうなると、岩塩はなんの役にも立たなくなる。
 - ⑥岩塩は、肥料の発酵を抑制するためにも用いられていた。
 - ⑦役立たずになった岩塩は、外に投げ捨てられるだけである。
- (2) 弟子も塩分を失えば、外に投げ捨てられる。
 - ①弟子が持っている塩分とは、イエスに対する忠誠心である。
 - ②これは、救いを失うという意味ではなく、報賞を失うということである。
 - *弟子が受ける報賞（神の国での地位）を失う。
 - *より重要な奉仕につく機会を奪われる。

結論

1. 1コリ 3：11～15

1Co 3:11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

1Co 3:12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、

1Co 3:13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものを試すからです。

1Co 3:14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。

1Co 3:15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。

- (1) 忠実な弟子は、報いを受ける。
- (2) そうでない者は、救いを失うことはないが、損害を受ける。
- (3) これは、キリストの御座の裁きで起こることである。

(2) マタ 27 : 39~40

Mat 27:39 通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。

Mat 27:40 「神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」

- (1) 群衆は、イエスの計画は途中で終わったと思った。
 - ① 十字架上のイエスは、群衆のあざけりを受けた。
- (2) しかしイエスは、主のしもべとしての犠牲を払っておられた。
 - ① 主のしもべイエスは、死に至るまで忠実であった。
- (3) それゆえ、父なる神は、イエスの名を高く上げられた。
 - ① イエスは、父なる神の計画を完成しておられたのである。
- (4) イエスの弟子になりたいと思う動機はなにか。
 - ① イエスの愛に対する感謝の表現が、弟子になるということである。
 - ② イエスの弟子として報賞を受けたいからである。

(III) 米国留学に憧れた青春時代

- ① 価値ある目標
- ② 達成するための方法と犠牲の計算
- ③ 努力の継続
- ④ 動機の確認

ルカの福音書 72回
いなくなった羊のたとえ話
15：1～10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ15章のテーマは、「罪人に対する神の愛」である。
- ③イエスの奉仕は、貧しい人や罪人を対象としたものであった。
- ④ルカは、このグループに深い関心を示している。
- ⑤異邦人もまた、同じ範疇に属する人たちである。

(2) ルカ15：1～32の内容

- ①いなくなった羊のたとえ話（1～7節）
- ②なくした銀貨のたとえ話（8～10節）
- ③放蕩息子のたとえ話（11～32節）

(3) 注目すべき点

- ①3つのたとえ話には、共通点がある。
 - *所有物を失った際の悲しみ
 - *それを発見した際の喜び
- ②誰でも、似たような経験をする。
- ③私たち一人ひとり、父なる神の目に尊い存在である。

2. アウトライン

- (1) いなくなった羊のたとえ話（1～7節）
- (2) なくした銀貨のたとえ話（8～10節）

3. 結論

- (1) イエス時代のユダヤ人が使っていたたとえ話
- (2) 三位一体の神の愛

罪人に対する神の愛について学ぶ。

I. いなくなった羊のたとえ話（1～7節）

1. 1～2節

Luk 15:1 さて、取税人たちや罪人たちがみな、話を聞こうとしてイエスの近くにやって来た。

Luk 15:2 すると、パリサイ人たち、律法学者たちが、「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている」と文句を言った。

(1) 舞台設定

①取税人か罪人の食卓

②ルカ 14 : 34～35

Luk 14:34 塩は良いものです。しかし、もし塩が塩気をなくしたら、何によってそれに味をつけるのでしょうか。

Luk 14:35 土地にも肥やしにも役立たず、外に投げ捨てられます。聞く耳のある者は聞きなさい。」

*イエスは弟子志望者たちに、ご自身の教えに耳を傾けるように呼びかけた。

*パリサイ人や律法学者たちは、イエスの教えに耳を傾けていなかった。

(2) イエスの教えに応答したのは、ユダヤ人社会では見下されていた人たち。

①取税人は、ローマの手先となって富を得ていた。

②罪人は、不道德な者や、律法的に汚れた職業に就いている者である。

③彼らは、霊的に村八分にされていた。

④彼らは、癒やしを必要とする霊的病人である。

⑤「みな」とは、誇張法であろう。

(3) イエスの教えに肯定的なグループと、否定的なグループの対比

①「取税人たち、罪人たち」 vs. 「パリサイ人たち、律法学者たち」

(4) 「一緒に食事をする」とは、受け入れて交わりをすることである。

①イエスは、取税人たちや罪人たちを受け入れておられた。

②宗教的指導者たちは、「つぶやいた」。

*荒野でのイスラエルの民のつぶやきを想起させる。

2. 3～4 節

Luk 15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

Luk 15:4 「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

(1) イエスの聴衆の中には、羊飼いたちがいたことであろう。

- ①羊飼いは、パレスチナでは最も普通の職業である。
*パリサイ人から見れば、汚れた職業である。
- ②100匹というのは、羊飼いがひとりで導く平均的な数である。
- ③羊飼いは、毎晩頭数を数えた。

(2) ある日、一匹をなくした。

- ①この羊は、愚かさのゆえに群れから離れたのである。
- ②羊が愚かな家畜であることは、よく知られていた。
- ③1 ペテ 2:25

1Pe 2:25 あなたがたは羊のようにさまよっていた。／しかし今や、自分のたましいの牧者であり／監督者である方のもとに帰った。

(3) 羊飼いの対応

- ①100匹すべてが羊飼いの所有物である。
- ②彼は、99匹を野(荒野)に残して、1匹を見つけるまで捜し歩く。
- ③99匹は、自分たちは悔い改める必要がないと思っている人たちである。
- ④羊飼いは、どこまでも羊を捜す。

3. 5～6節

Luk 15:5 見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、

Luk 15:6 家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うでしょう。

(1) 羊飼いの喜び

- ①いなくなった羊を見つけ、その安全を確保した。
- ②喜んで羊を肩に担ぎ、家に戻る。
*最も容易な運搬法である。
*救われた者の特権を指している。
- ③近所の人たちを呼び集め、ともに喜ぶ。
- ④これらは、当時の一般的な農村の情景である。

4. 7節

Luk 15:7 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。

(1) 「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」

- ①これは皮肉である。

- ②これは、パリサイ人や律法学者を指している。
- ③彼らは、自分たちは正しいと思い込んでいた。

(2) ここでの対比

- ①1人の罪人の救いの喜び vs. 99人の救いのない状態の悲しさ
- ②「天に」とは、神の御前でという意味である。
- ③このたとえ話は、イエスが罪人と交わることを擁護している。
- ④イエスは、神の愛に基づいて行動している。

II. なくした銀貨のたとえ話 (8~10節)

1. 8~9節

Luk 15:8 また、ドラクマ銀貨を十枚持っている女の人が、その一枚をなくしたら、明かりをつけ、家を掃いて、見つけるまで注意深く捜さないでしょうか。

Luk 15:9 見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つけたから』と言うでしょう。

(1) 似たようなたとえ話が語られる。

- ①イエスは、ここでの教えの重要性を、聴衆が理解することを期待された。

(2) 女の人

- ①ルカは女性の聴衆に配慮している。
- ②先のたとえ話では、比較的裕福な男が、1匹の羊をなくした。
- ③このたとえ話では、比較的貧しい未婚の女が、1枚の銀貨をなくした。
- ④イエスは、パリサイ人たちが拒否するであろうことを予知した上で語っている。
- ⑤ドラクマ銀貨（ギリシアのコイン）＝デナリ銀貨（ローマのコイン）
 - *労働者の日当
- ⑥不注意のゆえに、銀貨をなくした。
- ⑦花嫁料（ケトゥバー）として貯めていたものであろう。
 - *結婚に際して、花嫁は花婿、または父親からこれを受け取った。
 - *当時のパレスチナでは、10枚であった。
 - *これは、離婚しても彼女が所有権を主張できる金である。
 - *10枚には、結婚指輪と同様の象徴的価値があった。
 - *1枚を失くすことには、金額的な損失以上の精神的損失があった。

(3) 彼女の対応

- ①窓がない（あっても小さい）ので、明かりをつけて探す。

- ②家を掃いて、見つけるまで注意深く探す。
 - *石の床には、小さな割れ目がたくさんあった。
 - *そこに銀貨が落ち込むと、なかなか見つからない。
 - *これは、考古学者には朗報である。年代推定に役立つ。
- ③見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、一緒に喜ぶ。

2. 10節

Luk 15:10 あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」

- (1) 最初のたとえ話と同じ教訓が語られる。
 - ①1人の罪人の救いは、大きな喜びをもたらす。
 - ②神の御使いたちは、地上における神の働きに興味を持っている。
 - ③彼らは、神の喜びを自分の喜びとする。

結論

1. イエス時代のユダヤ人が使っていたたとえ話

- (1) なくした銀貨のたとえ話
- (2) 適用が異なる。
 - ①この女が銀貨を捜すよりも熱心に、トラーを捜すべきである。
 - ②トラーの学びは、一時的な喜びではなく、永遠の報賞をもたらす。
 - ③しかし、トラーの教えは、業による救いである。
 - ④イエスの教えは、それとは異なる。
 - *神の愛
 - *救い主のあわれみ
 - *失われた者の救いに伴う喜び

2. 三位一体の神の愛

- (1) いなくなった1匹を探し歩く羊飼いは、イエスを指している。
 - ①イエスの生涯を思い出せ。
 - *①誕生、公生涯、拒絶。十字架の死と復活
 - ②ラビたちは、罪人が神のもとに来るなら神は許してくださると教えていた。
 - ③神が探し歩くという教えは、イエスに独特のものである。
- (2) なくなった銀貨を捜す女の人は、聖霊を指している。
 - ①みことばの光を掲げて、捜す。

- ②部屋の中に落ちていることは、分かっている。
- ③アダムとエバが木の間に身を隠していることは分かっていた。
- ④ザアカイがいちじく桑の木の葉の間に身を隠していることは分かっていた。

(3) 放蕩息子の父は、父なる神を指している。

- ①あるべき姿に戻れ。
- ②神は、私たちが喜び、誇りとしたいと思っておられる。

ルカの福音書 73回

放蕩息子のたとえ話

15:11~32

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ15章のテーマは、「罪人に対する神の愛」である。
- ③イエスの奉仕は、貧しい人や罪人を対象としたものであった。
- ④ルカは、このグループに深い関心を示している。
- ⑤異邦人もまた、同じ範疇に属する人たちである。

(2) ルカ15:1~32の内容

- ①なくなった羊のたとえ話(1~7節)
- ②なくした銀貨のたとえ話(8~10節)
- ③放蕩息子のたとえ話(11~32節)

2. アウトライン

- (1) 弟の物語(11~24節)
- (2) 兄の物語(25~32節)

3. 結論

- (1) ルカ15:17
- (2) 三位一体の神の愛

罪人に対する神の愛について学ぶ。

I. 弟の物語(11~24節)

1. 11節

Luk 15:11 イエスはまた、こう話された。「ある人に二人の息子がいた。」

- (1) 3つのたとえ話に共通した動詞は、エコウ(持つ)である。

- ①羊を百匹持っている人(4節)
- ②銀貨を十枚持っている女(8節)
- ③「ある人に二人の息子がいた」(11節)

* 「A certain man had two sons.」(KJV)

- ④3つのたとえ話では、すべて主人公が何か大切なものを持っている。

⑤所有者は、自己犠牲の精神でそれを守る。

(2) このたとえ話の中心テーマ

①放蕩息子の立ち帰りは感動的な話ではあるが、中心テーマではない。

②父なる神の愛も感動的な話ではあるが、それも中心テーマではない。

③2人の息子の対比が、中心テーマである。

*この点は、最後になるまで分からない。

④弟は取税人や罪人たち、兄はパリサイ人や律法学者たちである。

*適応においては、弟を異邦人、兄をユダヤ人と解釈してもよい。

2. 12～13節

Luk 15:12 弟のほうが父に、『お父さん、財産のうち私がいただく分を下さい』と言った。それで、父は財産を二人に分けてやった。

Luk 15:13 それから何日もしないうちに、弟息子は、すべてのものをまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して、財産を湯水のように使ってしまった。

(1) 通常の遺産相続

①父が年老いて、財産の管理運用ができなくなった時点で、遺産を分割する。

②兄は、弟の2倍の分を相続した。

(2) 弟の要求は、通常考えられないものである。

①親を敬うことが賞賛されたユダヤ人社会では、なおさら異常なことである。

②「お父さん。早く死んでくれ」と言っているのと同じである。

③このような場合、父は息子を厳しく処罰することができた(申21:21)。

④しかし父は、弟の要求を受け入れた。

*父の姿は、父なる神の寛容さを象徴している。

*神は、私たちの自由意志を尊重される。

⑤弟は財産の3分の1を得た。兄は3分の2を得たと思われる。

*父が死ぬまでは、土地を売ることはできない。

*父が活着ている間は、土地の収穫は父のものとなった。

⑥しかし弟は、それには構わず、土地を売って旅立った。

⑦聴衆のパリサイ人や律法学者たちは、最初からこの父親を軽蔑した。

(3) 弟は、遠い国に旅立った。

①年齢は、18歳以下であろう(独身であった)。

②自分捜しの旅に出たが、自分を見失った。

- ③「遠い国」とは、物理的距離ではなく、宗教的、文化的距離である。
*デカポリスの中のひとつであろう(ベテ・シャンの遺跡訪問)。

- (4) 彼は、放蕩して財産を使い果たした。
①「湯水のように」とは、意識である。
②人生経験がないために、財産の管理ができない。
③後で兄が言うように、「遊女と一緒に食いつぶした」のであろう(30節)。

3. 14~16節

Luk 15:14 何もかも使い果たした後、その地方全体に激しい飢饉が起こり、彼は食べることも困り始めた。

Luk 15:15 それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑に送って、豚の世話をさせた。

Luk 15:16 彼は、豚が食べているいなご豆で腹を満たしたいほどだったが、だれも彼に与えてはくれなかった。

- (1) 弟は、何もかも使い果たした。
①その後、その地方全体に激しい飢饉が起こった。
*古代世界では、よくある自然現象であった。
*飢饉は、「a blessing in disguise」である。
②彼は、生き延びるために、異邦人のもとに身を寄せた。
*豚を飼っているのが、異邦人だと分かる。
*ガリラヤ湖の東岸の地では、豚が飼育されていた。
③豚飼いは、ユダヤ人にとっては最悪の職業である。
④彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであった。
- (2) パリサイ人たちは、これでたとえ話が終わると予測したはずである。
①罪人は、当然の報いを受ける。
②弟は、ユダヤ社会から切り離され、援助を受ける資格を失った。

4. 17~20節 a

Luk 15:17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。』

Luk 15:18 立って、父のところに行こう。そしてこう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。」

Luk 15:19 もう、息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。』

Luk 15:20a こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとへ向かった。

- (1) 弟は、人生のどん底で目が覚めた。
 - ①父の家には、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいる。
 - ②しかし、自分は飢え死にしそうだ。

- (2) 彼は、雇い人の1人にしてもらおうと考えた。
 - ①息子として受け入れてもらうことは想定していない。
 - ②父に告げる内容を、リハーサルしている。
 - *「天」とは神のことである。
 - ③聴衆は、弟の決断をとんでもない「思い上がり」と考えたであろう。

5. 20節b

Luk 15:20b ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけて、かわいそうに思い、駆け寄って彼の首を抱き、口づけした。

- (1) 父親は、息子の帰りを待っていた。
 - ①父親は、家から遠かったのに、息子を見つけた。
 - ②かわいそうに思った。
 - ③駆け寄って、彼の首を抱き、口づけした。
 - *年長者の威厳を投げ捨てた。
 - *口づけは、家族愛の表現である。

6. 21～24節

Luk 15:21 息子は父に言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。もう、息子と呼ばれる資格はありません。』

Luk 15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い衣を持って来て、この子に着せなさい。手に指輪をはめ、足に履き物をはかせなさい。』

Luk 15:23 そして肥えた子牛を引いて来て屠りなさい。食べて祝おう。

Luk 15:24 この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』こうして彼らは祝宴を始めた。

- (1) 父親は、息子のことばを途中でさえぎり、彼を息子として迎えた。
 - ①息子の悔い改めが真実であることを理解した。
 - ②着物は威厳の象徴、指輪と靴は自由民の象徴である。
 - ③宴会を開いた。
 - *子牛1頭は、村中の人を招いても十分な量である。
 - *今日でもユダヤ人たちは、大宴会を開く(パール・ミツバ、結婚披露宴)。

④ここで、宴会のテーマが再登場する。

*宴会は、メシア的王国の象徴である。

*聴衆は、悔い改めた罪人が御国に入っている姿を想像することができた。

*弟は、悔い改めた罪人の象徴である。

*では、兄はどうなったのか。

(2) 古代の作家がよく採用した文学手法がある。

①クライマックスを最後まで隠しておくという手法である。

②ここまでの展開は、前の2つのたとえ話と同じである。

③最後に、クライマックスがくる。

II. 兄の物語 (25～32 節)

1. 25～28 節 a

Luk 15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえてきた。

Luk 15:26 それで、しもべの一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。

Luk 15:27 しもべは彼に言った。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。』

Luk 15:28a すると兄は怒って、家に入ろうとしなかった。

(1) 兄は、パリサイ人や律法学者たちの象徴である。

①兄は、弟が宴会の席にいることを喜ばなかった。

②パリサイ人や律法学者たちは、罪人が御国に入るという話を喜ばなかった。

③兄は、宴会の席に入ることを拒否した。

*兄もまた放蕩息子であった。弟とは種類が異なる。

④パリサイ人や律法学者たちは、イエスが提示した御国に入ることを拒否した。

2. 28b～30 節

Luk 15:28b それで、父が出て来て彼をなだめた。

Luk 15:29 しかし、兄は父に答えた。『ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。』

Luk 15:30 それなのに、遊女と一緒に父の財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。』

(1) 父親は家から出て来て、侮辱的な態度を取る兄をなだめた。

①イエスは、パリサイ人や律法学者たちとも食事をともにした。

②イエスは、すべての人を御国に招かれた。

(2) 兄の態度と自己認識

- ①「父よ」と呼びかけないのは、軽蔑のしるしである。
- ②自分は、長年奴隷のように働き、戒めを守った。
- ③なのに、宴会を開いてもらったことはない。
- ④弟の帰還によって何かを失ったわけではないのに、不満を口にしている。
- ⑤兄は、業によって父との関係を保てると思った。
- ⑥兄は、愛のゆえに父に仕えたのではない。
- ⑦兄は、自分のことを奴隷のように考えていた。

3. 31～32節

Luk 15:31 父は彼に言った。『子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。』

Luk 15:32 だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。』

- (1) 兄には、家にいる喜びと、父の財産の所有権が与えられていた。
 - ①宗教的指導者たちは、選びの民として特権的地位を有していた。
 - ②彼らには、神の啓示のことばが委ねられていた。
- (2) 兄は、弟の帰還を喜ぶべきであった。
 - ①兄は、「あなたの息子」と言う。
 - ②父は、「おまえの弟」と言う。

結論

1. ルカ 15:17

(1) 17節

Luk 15:17 しかし、彼は我に返って言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が、なんと大勢いることか。それなのに、私はここで飢え死にしようとしている。』

(2) 訳文の比較

「しかし、彼は我に返って言った」(新改訳2017)

「そこで、彼は我に返って言った」(新共同訳)

「そこで彼は本心に立ちかえって言った、」(口語訳)

「こんな毎日を送るうち、彼もやっと目が覚めました」(リビングバイブル)

- ①彼は、遠い国にいた。

- ②彼は、神から遠く離れていた。
- ③彼は、本来の自分の姿に気づいた。
- (3) 本来の自分の姿に立ち返ることが、悔い改めである。
 - ①私は、神の「かたち」に創造されている。
 - ②今の私は、本来の私の姿ではないと気づくことが救いの第一歩である。
 - ③このたとえ話では、兄の反応は記されていない。
 - *彼は、「我に返った」のだろうか。

2. 三位一体の神の愛

- (1) いなくなった1匹を探し歩く羊飼いは、イエスを指している。
 - ①イエスの生涯を思い出せ。
 - *誕生、公生涯、拒絶。十字架の死と復活
 - ②ラビたちは、罪人が神のもとに来るなら神は許してくださると教えていた。
 - ③神が捜し歩く、神が走り寄る、という教えは、イエスに独特のものである。

- (2) なくなった銀貨を捜す女の人は、聖霊を指している。
 - ①みことばの光を掲げて、捜す。
 - ②部屋の中に落ちていることは、分かっている。
 - ③アダムとエバが木の間に身を隠していることは分かっていた。
 - ④ザアカイがいちじく桑の木の葉の間に身を隠していることは分かっていた。

- (3) 放蕩息子の父は、父なる神を指している。
 - ①父は、立ち返った息子をそのまま受け入れた。
 - ②息子が本当に悔い改めたかどうかを確認してから、受け入れたのではない。
 - ③父なる神は、悔い改めた罪人を喜んで迎えてくださる。

ルカの福音書 74回
忠実な管理人としての責務
16：1～13

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

②ルカ15章のテーマは、「罪人に対する神の愛」である。

*神は罪人を招いておられる。

③ルカ16章のテーマは、弟子の責務である。

*特に、富の使用に関する教えが語られる。

(2) ルカ16：1～31の内容

①不正な管理人のたとえ話（1～8節）

②たとえ話の適用（9～13節）

③パリサイ人たちが叱責するイエス（14～18節）

④金持ちとラザロの物語（19～31節）

2. アウトライン

(1) 不正な管理人のたとえ話（1～8節）

(2) たとえ話の適用（9～13節）

3. 結論

(1) 富に関する誤解

(2) 富に関する正しい理解

(3) 2人の主人

不正な管理人のたとえ話について学ぶ。

I. 不正な管理人のたとえ話（1～8節）

はじめに

(1) 「不正な管理人のたとえ話」は、極めて難解である。

①イエスが不正を奨励しているかのように読める。

②解釈の鍵は、「不正の富」ということばにある。

③このたとえ話は、「悪いこと」を用いて「良いこと」を教えている。

1. 1節

Luk 16:1 イエスは弟子たちに対しても、次のように語られた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この管理人が主人の財産を無駄遣いしている、という訴えが主人にあった。」

(1) イエスは、弟子たちに話している。

- ①これは、「忠実な管理人としての責務」を教えるためのたとえ話である。
- ②聴衆が誰かを判断することが、たとえ話の解釈のために重要である。
- ③周りで、パリサイ人たちも聞いている。

*彼らは、イエスの教えをあざ笑う（14節）。

(2) ある金持ちが、ひとりの管理人を雇っていた。

- ①管理人とは、現代のファイナンシャルプランナーや管財人に相当する。
- ②イエス時代、金持ちは資産運用のために管理人を雇うことが一般的だった。
- ③資産は主人のものであり、管理人はその運用を任されているだけである。
- ④この管理人は、主人の財産を無駄遣いしていた。

*放蕩息子が父の遺産を「湯水のように使った」と似ている。

*ともに、「diaskorpizo」（ディアスコルピゾウ）という動詞である。

- ⑤誰かがそのことを主人に訴えた。

2. 2節

Luk 16:2 主人は彼を呼んで言った。『おまえについて聞いたこの話は何なのか。会計の報告を出しなさい。もうおまえに、管理を任せておくわけにはいかない。』

(1) たとえ話からは、管理人の失敗が意図的なものなのかどうかは分からない。

- ①主人は、管理人のことを不正直というよりも無責任と考えている。
- ②それゆえ、解雇する前に、管理人に帳簿を整理する時間を与えた。

3. 3～4節

Luk 16:3 管理人は心の中で考えた。『どうしよう。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力はないし、物乞いをするのは恥ずかしい。』

Luk 16:4 分かった、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、人々が私を家に迎えてくれるようにすればよいのだ。』

(1) 管理人は、対策を考えた。

- ①誰も自分を管理人として雇ってくれないだろう。
- ②肉体労働は、自分には無理である（老年になる。事務職であった）。
- ③物乞いは、不名誉な職業である。

④知恵を働かせることならできる（主人の財産を盗むこと）。

(2) 彼は、主人の債務者たちの多くが、小作農であることを思い出した。

①彼らは、収穫量の中からある歩合を払うことになっていた。

②収穫期までは、支払う必要はない。

③管理人は、負債を減らしてやれば将来自分を雇ってくれるだろうと考えた。

4. 5～7節

Luk 16:5 そこで彼は、主人の債務者たちを一人ひとり呼んで、最初の人に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言った。

Luk 16:6 その人は『油百バテ』と答えた。すると彼は、『あなたの証文を受け取り、座ってすぐに五十と書きなさい』と言った。

Luk 16:7 それから別の人に、『あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、その人は『小麦百コル』と答えた。彼は、『あなたの証文を受け取り、八十と書きなさい』と言った。

(1) 最初の人

①油 100 バテ → 50 バテ

②バテとは「娘」のこと。1人の少女が運べる水の量。

*1バテは、約8.5ガロン（約32リットル）

*100バテは、約3,200リットル

*オリーブの木150本分（1000デナリに相当する）

*この人は、現代の貨幣価値で約500万円免除された。

(2) 別の人

①小麦 100 コル → 80 コル

②100コルは、100エーカーの収穫量（2,500デナリに相当する）

*この人もまた、約500万円免除された。

*免除された割合は異なるが、ほぼ同額が免除されたことになる。

(3) この管理人には知恵がある。

①両者ともに裕福な人なので、将来管理人として雇ってもらえる可能性がある。

②自分が手を染めるのではなく、負債者に修正させている。

③書類上の変更なので、発覚の可能性が低い。

④当時、干ばつの時には負債を減額し、名声を得る人が多くいた。

*もし主人が免除を取り消せば、面目を失くす可能性がある。

⑤古代世界では、奴隷が主人を出し抜くという物語が流布していた。

5. 8節

Luk 16:8 主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。

(1) 主人は、管理人が賢く行動したのをほめた。

- ①管理人の不正をほめたのではない。
- ②管理人は、将来への備えをしたのである
- ③これは、「悪いこと」を用いた良い教えである。

(2) 未信者（この世の子ら）と信者（光の子ら）の対比

①未信者は、この世のことに関しては賢く振る舞う。

*この管理人は、自分の将来の備えをしたのである。

②それに比べると、信者は、天国のことに関して賢く振る舞っていない。

II. たとえ話の適用 (9～13節)

1. 9節

Luk 16:9 わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。

(1) 地上の富を、魂を勝ち取るために使用すべきである。

①「不正の富」(unrighteous mammon) とは、この世の富のことである。

*これは、ラビ用語である。

②「富がなくなったとき」(when you fail) とは、死んだ時という意味である。

*ギリシア語の「エクレイポウ」である。

③地上の富を用いて伝道したなら、天での友人ができる。

*これは、富の使用によって天に入れるという意味ではない。

2. 10～12節

Luk 16:10 最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。

Luk 16:11 ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか。

Luk 16:12 また、他人のものに忠実でなければ、だれがあなたがたに、あなたがた自身のものを持たせるでしょうか。

(1) 小さいこと

- ①地上の富（不正の富）のことである。
 - ②他人のもののことである（富は神のもの）。
 - ③富の価値は低い（小さいこと）。
- (2) 大きいこと
- ①永遠に価値あるもの（霊的財産）である。
 - ②真の富のことである。
 - ③自分が所有できるもののことである（永遠の命は自分のもの）。
- (3) 小さいことに忠実な人に、大きいことが委ねられる。
- ①地上の富の管理に忠実な人は、キリストから報賞を得る。

3. 13節

Luk 16:13 **どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。」**

- (1) 2人の主人に仕えることはできない。
- ①神に仕えるか。
 - ②富（マモン）（アラム語）に仕えるか。

結論

1. 富に関する誤解

- (1) **パリサイ人たちの教え**
- ①**神は愛する人を富ませる。**
 - ②**富は、神に愛されている証拠である。**
- (2) **今日の「繁栄の神学」も、同じ教理的過ちを犯している。**
- ①**信仰によって、健康、富、成功などが手に入るという教えである。**
 - ②**人格の完成については、ほとんど取り上げない。**

2. 富に関する正しい理解

- (1) **地上の富を軽視するのは間違っている。**
- ①**光の子らは、この世の子ら以上に、富の管理について長けている必要がある。**
 - ②**神がすべて与えてくださると言っ、無責任になるのはよくない。**
- (2) **地上の富を重視し過ぎるのも間違っている。**
- ①**地上の富は、「まことの富」を得るために用いるべきである。**

- ②「まことの富」とは、救いであり、主イエスとの関係である。
- ③御国の拡大のためにお金を使う人は、幸いである。
- ④それは、「小さなこと」を使って、「大きなこと」を成し遂げることである。

3. 2人の主人

- (1) 奴隷が2人の主人を持てば、矛盾した命令が来て、働くことができなくなる。
- (2) 光の子らはマモンに仕えるのではなく、マモンを利用して神に仕えるべきである。
- (3) 1テモ6:9~10

1Ti 6:9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑と畏と、また人を滅びと破滅に沈める、愚かで有害な多くの欲望に陥ります。

1Ti 6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。

ルカの福音書 75回
金持ちとラザロの物語
16：14～31

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ15章のテーマは、「罪人に対する神の愛」である。
 - *神は罪人を招いておられる。
- ③ルカ16章のテーマは、弟子の責務である。
 - *特に、富の使用に関する教えが語られる。

(2) ルカ16：1～31の内容

- ①不正な管理人のたとえ話（1～8節）
- ②たとえ話の適用（9～13節）
- ③パリサイ人たちを叱責するイエス（14～18節）
- ④金持ちとラザロの物語（19～31節）

2. アウトライン

- (1) パリサイ人たちを叱責するイエス（14～18節）
- (2) 金持ちとラザロの物語（19～31節）

3. 結論：個人的終末論

- (1) 死ぬとどこへ行くか。
- (2) 魂の状態はどのようなものか。
- (3) セカンドチャンスはあるか。
- (4) 死後に備える生き方とはどのようなものか。

金持ちとラザロの物語について学ぶ。

I. パリサイ人たちを叱責するイエス（14～18節）

1. 14～15節

Luk 16:14 金銭を好むパリサイ人たちは、これらすべてを聞いて、イエスをあざ笑っていた。

Luk 16:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとするが、神はあなたがたの心をご存じです。人々の間で尊ばれるものは、神の前では忌み嫌われるもの

なのです。

- (1) パリサイ人たちは、イエスをあざ笑っていた。
 - ①彼らは、「不正な管理人のたとえ」の内容に同意しなかった。
 - ②彼らは、2人の主人に仕えようとしていた。
 - ③表面的には敬虔を装いながら、内面は貪欲であった。

- (2) イエスは、彼らの考え方を叱責された。
 - ①彼らは、神に愛されている者は金持ちになると教えていた。
 - ②彼らの教えは、人間的なもので、神に憎まれるものである。
 - ③金持ちであることは、その人が義人であるという証拠ではない。
 - ④彼らは、地上の富で友人を作るのではなく、金銭を好んでいた。
 - ⑤これは、偶像礼拝の罪である。
 - ⑥彼らの将来を保証するのは、金銭ではなく、神である。
*金持ちとラザロの物語は、それを教えている。

2. 16節

Luk 16:16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音が宣べ伝えられ、だれもが力づくで、そこに入ろうとしています。

- (1) 「律法と預言者」とは、旧約聖書のことである。
 - ①バプテスマのヨハネは、旧約時代における最後の預言者である。
 - ②バプテスマのヨハネとイエスによって、神の国の福音が宣べ伝えられている。
 - ③それは、旧約聖書が預言していたことである。

- (2) 「だれもが力づくで、そこに入ろうとしています」
 - ①民衆は、モーセの律法から逸脱したパリサイ派神学に束縛されていた。
 - ②宗教的指導者たちは、民衆がイエスをメシアとして受け入れることを妨害した。
 - ③民衆にとっては、神の国に入ることは、「戦い」であった。

3. 17節

Luk 16:17 しかし、律法の一画が落ちるよりも、天地が滅びるほうが易しいのです。

- (1) パリサイ人たちは、モーセの律法を骨抜きにしていた。
 - ①彼らにとっては、口伝律法の方が重要であった。
 - ②しかしイエスは、モーセの律法はことごとく成就すると宣言された。

4. 18節

Luk 16:18 だれでも妻を離縁して別の女と結婚する者は、姦淫を犯すことになり、夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すことになります。

- (1) モーセの律法軽視の実例として、離婚に関する教えが取り上げられる。
 - ①パリサイ人たちは、離縁と再婚を軽く考えていた。
 - ②別の女性と結婚するために、大した理由もなく妻を離縁した。
 - ③この方法なら、姦淫には当たらないと考えていた。
 - ④これは、人間の目には正しく見えても、神の目には姦淫に当たる。

II. 金持ちとラザロの物語 (19～31 節)

1. 19～21 節

Luk 16:19 ある金持ちがいた。紫の衣や柔らかい亜麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。

Luk 16:20 その金持ちの門前には、ラザロという、できものだらけの貧しい人が寝ていた。

Luk 16:21 彼は金持ちの食卓から落ちる物で、腹を満たしたいと思っていた。犬たちもやって来ては、彼のできものをなめていた。

- (1) 金持ちとラザロの対比
 - ①金持ちと彼の兄弟たちは、パリサイ人を象徴している。
 - ②ラザロは、死後のいのちを信じている信者を象徴している。
- (2) 金持ちは、いつも紫の布や細布を着ていた。
 - ①紫の布は高価であった。細布は細い麻で織った下着である。
 - ②彼は、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。
 - ③パリサイ人たちの教えでは、金持ちの彼は義人であるが、実態はそうではない。
 - ④彼は、隣人愛に欠けている。これが、救われていない証拠である。
 - ⑤彼は、金持ちだからではなく、信仰が欠如しているから救われていない。
- (3) ラザロは実名で出ているので、これは「たとえ話」ではなく「実話」である。
 - ①彼は、できものだらけの貧しい人で、金持ちの門前で寝ていた。
 - ③彼は、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。
 - ④犬もやって来ては、彼のできものをなめていた。
 - ⑤パリサイ人たちの教えでは、ラザロは罪人であるが、実態はそうではない。
 - ⑥彼は、貧しいからではなく、神を信頼していたから義人である。

2. 22～23 節

Luk 16:22 しばらくして、この貧しい人は死に、御使いたちによってアブラハムの懷に連れ

て行かれた。金持ちもまた、死んで葬られた。

Luk 16:23 金持ちが、よみで苦しみながら目を上げると、遠くにアブラハムと、その懐にいるラザロが見えた。

(1) ラザロは死んで、アブラハムの懐に連れて行かれた。

①死者の魂が行く場所は、「よみ」である。シオール/ハデスである。

②シオール/ハデスは、2つに分かれている。

*義人の行く所は、「アブラハムの懐」である。

*これは、パラダイスと同義である。

*罪人の行く所は、狭義の「シオール/ハデス」である。

③ラザロは、「アブラハムの懐」に連れて行かれた。

④パリサイ派の教えとは正反対のことが起こっている。

(2) 金持ちも死んだ。

①彼の魂も「よみ」に行った。そこは、狭義の「シオール/ハデス」である。

②彼は、「よみ」で苦しんでいた。

③彼は、はるかかなたにアブラハムとラザロを見た。

④この状態は、パリサイ派の教えとは正反対である。

3. 24～26 節

Luk 16:24 金持ちは叫んで言った。『父アブラハムよ、私をあわれんでラザロをお送りください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすようにしてください。私はこの炎の中で苦しんでたまりません。』

Luk 16:25 するとアブラハムは言った。『子よ、思い出しなさい。おまえは生きている間、良いものを受け、ラザロは生きている間、悪いものを受けた。しかし今は、彼はここで慰められ、おまえは苦しみをだえている。』

Luk 16:26 そればかりか、私たちとおまえたちの間には大きな淵がある。ここからおまえたちのところへ渡ろうとしても渡れず、そこから私たちのところへ越えて来ることもできない。』

(1) 金持ちは、苦しみの中からアブラハムに向かって叫んだ。

①彼は、アブラハムの子孫である。

②パリサイ派の教えでは、アブラハムの子孫は自動的に神の国に入るはずである。

③彼は、ラザロをよこして、水一滴でも口に落としてほしいと願った。

(2) アブラハムは、大きな淵があるので、往来は不可能であると答える。

①シオール/ハデスでは、両方の場所から互いを見ることはできる。

②しかし、大きな淵があるので、場所を移動することはできない。

4. 27～31節

Luk 16:27 金持ちは言った。『父よ。それではお願いですから、ラザロを私の家族に送ってください。』

Luk 16:28 私には兄弟が五人いますが、彼らまでこんな苦しい場所に来ることがないように、彼らに警告してください。』

Luk 16:29 しかし、アブラハムは言った。『彼らにはモーセと預言者がいる。その言うことを聞くがよい。』

Luk 16:30 金持ちは言った。『いいえ、父アブラハムよ。もし、死んだ者たちの中から、だれかが彼らのところに行けば、彼らは悔い改めるでしょう。』

Luk 16:31 アブラハムは彼に言った。『モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

(1) 金持ちは、ラザロを父の家に送り、5人の兄弟たちに警告してほしいと願った。

①5人の兄弟たちが、自分と同じ苦しみに会わないように。

(2) アブラハムは、彼らには「モーセと預言者」があると答えた。

①旧約聖書のことである。

②つまり、神のことばである。

(3) 金持ちは、復活したラザロが行けば、5人の兄弟たちは信じるはずだと言う。

(4) アブラハムは、人間の性質を考えると、そうはならないと答える。

①神のことばに耳を傾けないなら、どんな奇跡が起こっても信じるものではない。

②これは、イエスご自身の体験でもある。

③奇跡を見ても、人は神を信じるわけではない。

結論：個人的終末論

1. 死ぬとどこへ行くのか。

(1) よみ (シオール/ハデス) に行く。

(2) アブラハムの懐 (パラダイス) とハデス (苦しみの場所) に分かれている。

(3) キリストの昇天以降、パラダイスの部分は天に上げられた。

(4) 新約の聖徒たちの魂は、天にあるパラダイスに行く。

(5) エペ4:8

Eph 4:8 そのため、こう言われています。／「彼はいと高き所に上ったとき、／捕虜を連れ

て行き、／人々に贈り物を与えられた。」

2. 魂の状態はどのようなものか。

(1) ある人たちは、復活するまで魂は眠りの状態にあると主張する。

(2) 1テサ4:13~14

1Th 4:13 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。

1Th 4:14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。

①「眠った人たち」とは、肉体的死を表現する比喩のことばである。

②この聖句を根拠に、魂の眠りを主張することはできない。

(3) 金持ちには、意識があり、判断力がある。

(4) これは、クリスチャンにとっては大いなる希望である。

3. セカンドチャンスはあるか。

(1) パリサイ派の神学の問題点は、神のことばを離れて口伝律法を作ったこと。

(2) 「金持ちとラザロの物語」の中で、聴衆が驚いた点は何か。

①貧乏人が、アブラハムのふところに行った。

②金持ちが、よみ(ハデス)に行った。

(3) セカンドチャンスを感じる人は、驚くことであろう。

(4) 人は、自分に与えられている啓示の量に応じて裁かれる。

①自然界を通した啓示

②良心を通した啓示

③神のことば

(5) セカンドチャンス論は、問題を解決するよりも新たな問題を作り出す。

①伝道の意欲がなくなる。

②伝道しない方がよいという極論に至る可能性がある。

4. 死後に備える生き方とはどのようなものか。

(1) イエス・キリストを救い主として信じる。

(2) 地上の富を、神の国拡大のために用いる。

ルカの福音書 76回
弟子道に関する逆転の発想（1）
17：1～10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ16章のテーマは、弟子の責務であった。
 - *特に、富の使用に関する教えが語られた。
 - *パリサイ人たちは、多くのユダヤ人たちを信仰から遠ざけていた。
- ③ルカ17章は、弟子たちも同胞につまずきを与えることがあるという警告。
 - *私たちには、弟子道に関する逆転の発想が必要である。

(2) ルカ17：1～19の内容

- ①つまずきを与えることは、深刻な罪（1～2節）。
- ②罪を犯した者を赦すことは、弟子の責務（3～4節）。
- ③信仰は量ではなく、質が問題（5～6節）。
- ④責務を果たすのは、当然のこと（7～10節）。
- ⑤感謝を忘れてはならない（11～19節）。

2. アウトライン

- (1) つまずきを与えることは、深刻な罪（1～2節）。
- (2) 罪を犯した者を赦すことは、弟子の責務（3～4節）。
- (3) 信仰は量ではなく、質が問題（5～6節）。
- (4) 責務を果たすのは、当然のこと（7～10節）。

3. 結論：逆転の発想

弟子道に関する逆転の発想（1）について学ぶ。

I. つまずきを与えることは、深刻な罪（1～2節）。

1. 1節

Luk 17:1 イエスは弟子たちに言われた。「つまずきが起こるのは避けられませんが、つまずきをもたらす者はわざわいです。

- (1) イエスの弟子たちであっても、完ぺきではなかった。
 - ①罪が支配する世にあっては、つまずきをなくすのは不可能なことである。

(2) 「つまずき」は、ギリシア語で「skandalon」である。

- ①元の意味は、獲物を捕獲する「罨」に仕込んだ餌の付いた木片である。
- ②餌に食いつくと、「罨」が閉まり、獲物が捕獲される。
- ③このことばは、罨にかかった獲物の行動も指す。

(3) ここでは、このことばが比喩的に用いられている。

- ①他の人たちに罪を犯させること。
- ②他の人たちを、イエスから遠ざけること（信仰から遠ざけること）。
- ③弟子であっても、弱さのゆえに、つまずきをもたらすことがある。
- ④だからと言って、責任がなくなるわけではない。

2. 2節

Luk 17:2 その者にとっては、これらの小さい者たちの一人をつまづかせるより、ひき臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれるほうがましです。

(1) パリサイ人たちは、つまずきを与えていた。

- ①律法主義というつまずき
- ②拝金主義というつまずき

(2) イエスの弟子たちも、つまずきを与える可能性がある。

- ①イエスの弟子たちは、つまずきの原因となってはならない。
- ②「小さい者たちの一人」とは、第一義的には、霊的幼子たちであろう。
- ③彼らは、まだ信仰が成長していないので、悪影響を受けやすいのである。

(3) **逆転の発想①**

- ①つまずきを与えることは、深刻な罪である。
- ②処罰に関して厳しいことばが使われている。
(ILL) カペナウムの遺跡に置かれている石臼
- ③この罪は、道徳的な罪や、聖書の単純な意味を変更するような教えである。

II. 罪を犯した者を赦すことは、弟子の責務（3～4節）。

1. 3節

Luk 17:3 あなたがたは、自分自身に気をつけなさい。／兄弟が罪を犯したなら、戒めなさい。そして悔い改めるなら、赦しなさい。

(1) イエスの弟子は、つまずいてはならない。

①兄弟の罪に対しては、2段階の対処法を実行する。

*罪を犯している人を戒める。

*悔い改めれば、赦す。

2. 4節

Luk 17:4 一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回あなたのところに来て『悔い改めませう』と言うなら、赦しなさい。」

(1) 逆転の発想②

①あなたに対して罪を犯した者が、「悔い改めませう」と言うなら、赦してやる。

②7度の赦しは、完全な赦しを意味する。

③つまり、心に怒りや憎しみの感情を抱かないということである。

III. 信仰は量ではなく、質が問題（5～6節）。

1. 5節

Luk 17:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増し加えてください。」

(1) 無限に赦すことは、極めて難しいことである。

①信仰がなければ、その命令を実行することができない。

②それで弟子たちは、「私たちの信仰を増し加えてください」と願ったのである。

2. 6節

Luk 17:6 すると主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があれば、この桑の木に『根元から抜かれて、海の中に植われ』と言うなら、あなたがたに従います。」

(1) 逆転の発想③

①イエスは、信仰は量ではなく、質が問題であると教えた。

②どれほどの信仰があるかではなく、誰を信じているかが問題である。

③質的に正しい信仰は、「からし種ほどの信仰」である。

④真の信仰には、深く根を張る桑の木をも動かすほどの力がある。

*桑の木とは、いちじく桑の木である。

*この木は、地中に根を広げる。

⑤ここでは、桑の木は私たちの内にあるプライド、自我を象徴している。

⑥赦しの心がないのは、プライドや自我の問題である。

⑦それを抜き取る力は、信仰から来る。

⑧私たちが信じたお方は、主のしもべであり、謙遜と愛と赦しに生きた方である。

IV. 責務を果たすのは、当然のこと（7～10節）。

1. 7～8節

Luk 17:7 あなたがたのだれかのところに、畑を耕すか羊を飼うしもべがいて、そのしもべが野から帰って来たら、『さあ、こちらに来て、食事をしなさい』と言うのでしょうか。

Luk 17:8 むしろ、『私の夕食の用意をし、私が食べたり飲んだりする間、帯を締めて給仕しなさい。おまえはその後で食べたり飲んだりしなさい』と言うのではないのでしょうか。

(1) 忠実なしもべのたとえ話

- ①小規模な家なので、しもべは複数の役割を果たしていた。
- ②主人は、野らから帰って来たしもべ（自由意志の奴隷）を食卓に招かない。
- ③主人としもべがともに食卓に横たわることはない。
- ④むしろ、しもべに食事の用意をさせる（少数の奴隷しかいない家）。
- ⑤主人の食事が終わってから、しもべは食事をする。

2. 9～10節

Luk 17:9 しもべが命じられたことをしたからといって、主人はそのしもべに感謝するでしょうか。

Luk 17:10 同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。

(1) 訳文の比較

「私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです」（新改訳 2017）

「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」

（新共同訳）

「わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません」（口語訳）

(2) 逆転の発想④

- ①主人は奴隷に感謝を表さない。
- ②イエスの弟子は、「なすべきことをしただけです」と思うべきである。
- ③奉仕をしたから、神に対して貸しを作ったように思うのは間違っている。

(3) たとえ話の教訓

- ①信仰は、奉仕を通して成長する。
- ②奉仕→信仰が育つ→より大きな奉仕ができる→より信仰が育つ

結論：逆転の発想

1. 信仰が幼い者につまづきを与えることは、深刻な罪である。

(1) 処罰に関して厳しいことばが使われている。

(2) この罪は、道徳的な罪や、聖書の単純な意味を変更するような教えである。

2. あなたに対して罪を犯した者が、「悔い改めます」と言うなら、赦してやる。

(1) 7度の赦しは、完全な赦しを意味する。

(2) つまり、心に怒りや憎しみの感情を抱かないということである。

(3) この赦しは、イエスを見上げることによって可能となる。

3. イエスは、信仰は量ではなく、質が問題であると教えた。

(1) どれほどの信仰があるかではなく、誰を信じているかが問題である。

(2) 質的に正しい信仰は、「からし種ほどの信仰」である。

(3) 真の信仰には、深く根を張る桑の木をも動かすほどの力がある。

(4) 桑の木は、私たちの内にあるプライドや自我を象徴している。

(5) 私たちが信じたお方は、主のしもべであり、謙遜と愛と赦しに生きた方である。

4. 主人は奴隷に感謝を表さない。

(1) イエスの弟子は、「なすべきことをしただけです」と思うべきである。

(2) 忠実な弟子には報賞が与えられるが、それは、ここでの教えと矛盾したものではない。

(3) 2コリ 5:9~10

2Co 5:9 そういうわけで、肉体を住まいとしていても、肉体を離れていても、私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです。

2Co 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

ルカの福音書 77回
弟子道に関する逆転の発想（2）
17：11～19

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ16章のテーマは、弟子の責務であった。
 - *特に、富の使用に関する教えが語られた。
 - *パリサイ人たちは、多くのユダヤ人たちを信仰から遠ざけていた。
- ③ルカ17章のテーマは、弟子たちもつまずきを与えることがあるという警告。
 - *私たちには、弟子道に関する逆転の発想が必要である。
 - *これは、神の国が成就することを前提とした逆転の発想である。

(2) ルカ17：1～19の内容

- ①つまずきを与えることは、深刻な罪（1～2節）。
- ②罪を犯した者を赦すことは、弟子の責務（3～4節）。
- ③信仰は量ではなく、質が問題（5～6節）。
- ④責務を果たすのは、当然のこと（7～10節）。
- ⑤感謝を忘れてはならない（11～19節）。

(3) 10人のツァラアト患者の癒やし

- ①イエスの神性の証明は、主要テーマではない。
- ②前回の教え（責務を果たすのは当然）と恵みによる癒やしが対比されている。
- ③恵みに対して感謝を表すことは、イエスの弟子の責務である。

2. アウトライン

- (1) 10人のツァラアト患者（11～14節）
- (2) 戻って来た1人のツァラアト患者（15～16節）
- (3) 弟子訓練のことば（17～19節）

3. 結論

- (1) 10人のツァラアト患者から学ぶ教訓
- (2) サマリア人のツァラアト患者から学ぶ教訓

弟子道に関する逆転の発想（2）について学ぶ。

I. 10人のツァラアト患者（11～14節）

1. 11節

Luk 17:11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。

- (1) ルカの福音書では、地理的情報は新しいセクションの始まりを示している。
 - ①ルカ 17：11～19を「弟子道に関する逆転の発想」に含めた理由は、同じテーマが続くからである。
 - ②イエスの弟子にはどのような特徴があるかというテーマが続いている。
- (2) エルサレムに上る通常のルートは、ヨルダン川の東岸を南下することである。
 - ①イエスは、ガリラヤの南の国境とサマリアの北の国境の間を通った。
 - ②ヨルダン川の東岸に出ないで、そのままサマリアを南下した可能性もある。
 - ③いずれにしても、最後の過越の祭りを祝うためにエルサレムに上る旅である。
- (3) サマリアとガリラヤの境
 - ①同じグループの中に、ユダヤ人の患者とサマリア人の患者がいた。
 - ②共通の苦難（ツァラアト）が、彼らに仲間意識を与えたのである。

2. 12～13節

Luk 17:12 ある村に入ると、ツァラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、

Luk 17:13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。

- (1) ある村に入ると、10人のツァラアト患者がイエスに出会った。
 - ①聖書のツァラアトは、広範囲に及ぶ皮膚病であるが、ハンセン病ではない。
 - ②後になって分かるが、9人はユダヤ人、1人はサマリア人である。
 - ③通常、両者には人種的壁があったが、ツァラアトはそれを吹き飛ばした。
- (2) 彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げた。
 - ①レビ 13：45～46

Lev 13:45 患部があるツァラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。

Lev 13:46 その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる。

- ②彼らは、イエスに助けを求めた。
- ③「先生」（エピスタタ）（エピスタテイス）は、ルカだけが使っている。

*彼らは、イエスに対してなんらかの信仰を持っていた。

3. 14節

Luk 17:14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。

(1) イエスの応答は、彼らにとっては予想外のものであったと思われる。

①彼らは、こう期待していたのではないか。

*イエスなら、からだに触れて癒やしを祈ってくれる。

*あるいは、清めを宣言してくれる。

(2) しかしイエスは、自分のからだを祭司に見せなさいとだけ命じた。

①そのことばを信じて行動を起こすなら癒やされる、という約束である。

②これは、彼らの信仰を試すことばである。

*イエスを「エピスタテイス」と認めるなら、そのことばに従うはずである。

③彼ら全員が、その命令に従った。

*その結果、彼らは祭司のところに行く途中で癒やされた。

(3) イエスは、社会復帰のための律法の規定を尊重された（レビ記13～14章）。

①ツァラアトが癒やされたなら、祭司に自分のからだを見せる。

②祭司は、癒やされたという証明書を発行する。

③これによって、元患者たちは、ユダヤ人共同体に復帰することができる。

II. 戻って来た1人のツァラアト患者（15～16節）

1. 15～16節

Luk 17:15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かったと、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、

Luk 17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。

(1) そのうちの1人が、イエスの元に戻って来た。

①彼は、自分が癒やされたことが分かったと、大声で神をほめたたえた。

*彼は、イエスが神からの使者であることを認めた。

②彼は、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。

*これは、礼拝の姿勢である。

③彼は、サマリア人であった。

*これがこの出来事のメインポイントである。

*この事実を基に、弟子訓練のことばが語られる。

Ⅲ. 弟子訓練のことば（17～19節）

1. 17～18節

Luk 17:17 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこに
いるのか。」

Luk 17:18 この他国人のほか、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」

(1) イエスの3つの質問

- ①9人のユダヤ人たちの感謝のなさを浮き彫りにする。
- ②彼らは、ユダヤ人一般のイエスに対する無関心を浮き彫りにしている。

2. 19節

Luk 17:19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰が
あなたを救ったのです。」

(1) イエスは、その人を祝福された。

- ①彼の従順な姿勢は、信仰から出たものである。
- ②その信仰は、イエスに対する信仰である。
- ③正しい信仰が彼を癒やし、彼を救ったのである。
- ④彼は、魂の救いも得た。

結論：逆転の発想：神の国の成就を前提とした生き方

- 1. 信仰が幼い者につまずきを与えることは、深刻な罪である。
- 2. あなたに対して罪を犯した者が、「悔い改めます」と言うなら、赦してやる。
- 3. イエスは、信仰は量ではなく、質が問題であると教えた。
- 4. 主人は奴隷に感謝を表さない。

5. 感謝を忘れてはならない

(1) 10人のツァラアト患者たちの応答

- ①彼らは、イエスのことばを信じ、それに従った。
- ②その結果、癒やしを受けた。
- ③彼らに信仰はあったが、信仰に基づく忠実さはなかった。
- ④ユダヤ人たちは、サマリア人よりも律法に関する知識を持っていた。
- ⑤しかし彼らは、感謝するためにイエスのところに戻っては来なかった。
- ⑥彼らは、イエスから祝福を受けることは得意であったが、イエスをメシアとは信じなかった。

(2) サマリア人のツァラアト患者の応答

- ①サマリア人は、自分の身に起きたことは、特別な恵みであることを理解した。
- ②彼は、神の恵みを受けた者には感謝を表す道徳的義務があることを理解した。

(3) 詩103:1~2

Psa 103:1 わがたましいよ 【主】をほめたたえよ。／私のうちにあるすべてのものよ／聖なる御名をほめたたえよ。

Psa 103:2 わがたましいよ 【主】をほめたたえよ。／主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

ルカの福音書 78回

神の国と再臨

17:20～37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

②ルカ17章のテーマは、弟子道に関する教えである。

*これは、神の国が成就することを前提とした逆転の発想である。

③この箇所では、神の国と再臨のテーマが語られる。

*パリサイ人たちの質問がきっかけとなって、弟子訓練の教えが与えられる。

(2) ルカ17:20～18:8の内容

①パリサイ人たちの質問とイエスの短い回答（20～21節）

②弟子たちに向けた長い教え（22～37節）

③懇願するやもめのたとえ話（18:1～8節）

2. アウトライン

(1) パリサイ人たちの質問とイエスの短い回答（20～21節）

(2) 弟子たちに向けた長い教え（22～37節）

3. 結論

(1) イエスが語る神の国とは何か。

(2) ここで再臨のテーマが出てくるのはなぜか。

神の国と再臨について学ぶ。

I. パリサイ人たちの質問とイエスの短い回答（20～21節）

1. 20節a

Luk 17:20a パリサイ人たちが、神の国はいつ来るのかと尋ねたとき、

(1) パリサイ人たちは、神の国の到来に関して非常に興味を持っていた。

①バプテスマのヨハネは、「神の国は近づいた」と語っていた。

②イエスも、「神の国は近づいた」と語っていた。

③パリサイ人たちが神の国はいつ来るのかと尋ねたのは当然のことである。

(2) 当時のユダヤ教の考え方

- ①ユダヤ人たちは、世が混乱したとき、神が奇跡的に介入されると信じていた。
- ②メシアが到来し、ローマの圧政からユダヤ人たちを救う。
- ③その後、メシアを王とする神の国(メシア的王国)が地上に設立される。
- ④パリサイ人たちは、「外面的なしるし」と「政治的混乱」を待ち望んでいた。
- ⑤彼らには、初臨と再臨の区別が分からなかった。

(3) 現在のキリスト教の考え方

- ①多くの者が、神の国について無関心である。
- ②神の国を地上に成就する文字どおりの王国とは考えていない。
- ③神の国を比喩的に解釈する傾向が強い。

2. 20b～21節

Luk 17:20b イエスは彼らに答えられた。「神の国は、目に見える形で来るものではありません。」

Luk 17:21 『見よ、ここだ』とか、『あそこだ』とか言えるようなものではありません。見なさい。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」

- (1) イエスは、パリサイ人たちの神の国に関する神学的理解を否定された。
 - ①神の国は、彼らが考えているような方法で来るものではない。
- (2) 「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」
 - ①「the kingdom of God is within you.」(KJV, ASV)
 - ②「the kingdom of God is in the midst of you.」(RSV)
 - ③神の国が心の中にあるという意味ではない。
 - *パリサイ人たちは信者ではない。
 - *この点を理解しておかないと、神の国の比喩的解釈が正当化される。
 - ④彼らのただ中に立っているイエス自身が、神の国の代表であり象徴である。
 - ⑤そのイエスを、パリサイ人たちは受け入れなかった。

II. 弟子たちに向けた長い教え(22～37節)

はじめに

- (1) 「オリーブ山の説教」(マタ 24:1～51)の内容と似ている。
 - ①ルカは、将来に関する教えをさほど取り上げていない。
 - ②12:35～48、14:7～24、21:5～33

1. 22～23節

Luk 17:22 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない日が来ます。

Luk 17:23 人々は『見よ、あそこだ』とか、『見よ、ここだ』とか言いますが、行ってはいけません。追いかけてもいけません。

- (1) 神の国はすでに来ているのか、将来来るものなのか。
 - ①パリサイ人たちに向っては、すでに来ていると言われた。
 - ②弟子たちに向っては、再臨によって成就するものと教える。

- (2) まずイエスは、初臨と再臨の間の時代に言及する。
 - ①「人の子の日を一日でも見たいと願っても、」
 - *「人の子」とはメシアのことである（ダニ7:13~14）。
 - *弟子たちは、神の国が成就した様子を一日でも見たいと願う。
 - ②「見られない日が来ます」
 - *再臨の前に、激しい迫害が起こる。
 - ③人々のことばに惑わされてはならない。
 - *偽キリストがあちこちに現れる。

2. 24~25 節

Luk 17:24 人の子の日、人の子は、稲妻がひらめいて天の端から天の端まで光ると、ちょうど同じようになります。

Luk 17:25 しかし、まず人の子は多くの苦しみを受け、この時代の人々に捨てられなければなりません。

- (1) メシアの再臨は、明確な形で実現する。
 - ①メシアの再臨は、すべての人が認識できる形で実現する。
 - ②稲妻のひらめきをすべての人が認識するのと同じである。
 - ③メシアの再臨は、後から気がつくようなものではない。

- (2) その前に、メシアはこの時代の人たちに苦しめられ、殺される。
 - ①不信仰なユダヤ人たちは、イエスを拒否し、十字架につけることを要求する。

4. 26~27 節

Luk 17:26 ちょうど、ノアの日が起こったのと同じことが、人の子の日にも起こります。

Luk 17:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていましたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

- (1) ノアの日と人の子の日の対比

- ①ノアが箱舟に入るその日まで、人々はノアの警告を無視した。
 - *彼らは、最後まで普段どおりの生活を続けた。
 - *彼らは、神の裁きに対する備えができていなかった。
- ②再臨の日まで、人々は裁きのメッセージを無視する。
 - *彼らは、患難期が始まるまで普段どおりの生活を続ける。
 - *彼らは、地上に下る神の裁きに対する備えができていない。

5. 28～29 節

Luk 17:28 また、ロトの日に起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、

Luk 17:29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

- (1) ロトの日に起こったことは、ノアの日の内容を補足している。
 - ①ソドムの人たちは、神の裁きが下るまで普段どおりに生活していた。
 - ②ロトがソドムから出て行ったその日に、神の裁きが下った。
 - ③人々は、神の裁きに対する備えができていなかった。
 - ④全員が滅びた。

6. 30～31 節

Luk 17:30 人の子が現れる日にも、同じことが起こります。

Luk 17:31 その日、屋上にいる人は、家に家財があっても、それを持ち出すために下に降りてはいけません。同じように、畑にいる人も戻ってはいけません。

- (1) 人の子が現れる日にも、同じことが起こる。
 - ①患難期が来ると、イスラエルの地に住む者はすぐに行動を起こすべきである。
 - ②彼らは、逃れの場に向ってすぐに移動しなければならない。

7. 32～33 節

Luk 17:32 ロトの妻のことを思い出さない。

Luk 17:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

- (1) ロトの妻から学ぶ教訓
 - ①彼女は、裁きの厳しさを過小評価した。
 - ②彼女は、逃れの場に行くことを躊躇した。
 - ③彼女は、古い生活に執着した。
 - ④そのために、塩の柱になってしまった。

(2) 肉のいのちを救おうとして魂のことを忘れる人は、肉のいのちさえも失う。

①患難期に、メシアへの忠実さのゆえにいのちを失う者は、永遠のいのちを得る。

8. 34～35 節

Luk 17:34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。

Luk 17:35 同じところで臼をひいている女が二人いると、一人は取られ、もう一人は残されます。」

(1) 内容は、不信者と信者の分離である。

①いかに親しい間柄であっても、1人は取られ、もう1人は残される。

*不信者は、裁きのために取られる。

*信者は、残されて神の国に入る。

②携挙のときとは正反対のことが起こる。

(2) 36 節は、欠落している。

①書記の誤りで、マタ 24 : 40 が付記されたのであろう。

9. 37 節

Luk 17:37 弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言うと、イエスは彼らに言われた。「死体のあるところ、そこには秃鷹が集まります。」

(1) 弟子たちは、この裁きがどこで起こるかを知りたがった。

①イエスは、場所を教えなかった。

②イエスは、どういう「しるし」を捜すべきかを教えた。

(2) 「死体のあるところ、そこには秃鷹が集まります」

①「死体」とは、患難期の終わりにおけるイスラエルの民の状態である。

②「秃鷹」とは、イスラエルの民を襲う軍勢である。

③イスラエルの民は、異邦人の軍勢に取り囲まれる。

④その場所は、ボツラ（現在のヨルダンにあるペトラ）である。

*ミカ 2 : 12～13、エレ 49 : 13～14、イザ 34 : 1～8、63 : 1～6

結論

1. イエスが語る神の国とは何か。

(1) イエスは、ユダヤ人たちにメシア的王国を提供された。

- (2) ユダヤ人たちは、イエスを拒否した。
- (3) それ以降、奥義としての王国の時代に移行した。
- (4) これは、目に見えない、霊的な王国である。
 - ①終末的な希望であるメシア的王国とは異なる。
- (5) これは、「キリスト教界」のことである。
- (6) これは、麦と毒麦が同時に育つ時代である。
- (7) これは、「種蒔きのたとえ」で表現される時代である。

2. ここで再臨のテーマが出て来るのはなぜか。

- (1) イエスの初臨の期間が終わろうとしている。
- (2) 初臨と再臨の間に別の時代が入って来る。
- (3) 奥義としての王国の時代がそれである。
- (4) これは、教会時代（恵みの時代）である。
- (5) その先に、再臨とメシア的王国の成就が待っている。
 - ①再臨の前に、患難期が地上を襲う。
 - ②携挙は、いつでも起こり得る。
 - ③再臨は、患難期の後に起こる。
 - ④患難期の訪れは、多くの人たちにとって予想外の出来事となる。
 - ⑤地上に住む人たちは全員、神の裁きに苦しむことになる。
 - ⑥イエスを信じて、携挙に与る人は幸いである。

ルカの福音書 79回
懇願するやもめのたとえ話
18：1～8

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。
- ②ルカ17章のテーマは、弟子道に関する教えである。
 - *これは、神の国が成就することを前提とした逆転の発想である。
- ③それに続いて、神の国と再臨のテーマが語られる。

(2) ルカ17：20～18：8の内容

- ①パリサイ人たちの質問とイエスの短い回答（20～21節）
- ②弟子たちに向けた長い教え（22～37節）
- ③懇願するやもめのたとえ話（18：1～8節）

2. アウトライン

- (1) 序文（1節）
- (2) 内容（2～5節）
- (3) 適用（6～8節）

3. 結論：祈りの背後にある信仰

- (1) 天の父は良い方であるという信仰
- (2) 苦難の中にいる人たちを思いやる信仰
- (3) 再臨を待ち望む信仰

継続した祈りの重要性について学ぶ。

I. 序文（1節）

1. 1節

Luk 18:1 いつでも祈るべきで、失望してはいけないことを教えるために、イエスは弟子たちにたとえを話された。

- (1) イエスは、弟子たちに向けてこのたとえ話を語っている。
 - ①章の区分に惑わされてはならない。
 - ②文脈上は、「神の国と再臨」の教えの結論となっている。
 - ③これは、初臨と再臨の間の期間も、忠実に生きるようにという励ましである。

④ルカは、やもめを頻繁に取り上げる（他の3つの福音書の合計よりも多い）。

(2) たとえ話の目的が最初に提示されている。

- ①いつでも祈るべきである。
- ②失望してはならない。
- ③背景には、初臨と再臨の間の「長くて困難な時期」がある。
- ④再臨の時、メシアはすべての不公平を正される。
- ⑤それゆえ、いかなる状況にあっても、神の恵みを求めて祈るべきである。
- ⑥ユダヤ人たちは、祈りは日に3度に限定していた。

II. 内容 (2~5 節)

1. 2~3 節

Luk 18:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。

Luk 18:3 その町に一人のやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私を訴える人をさばいて、私を守ってください』と言っていた。

(1) 裁判官の登場 (2 節)

- ①「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた」
- ②彼がユダヤ人か、ローマ人かは、重要なポイントではない。
- ③やもめが訴えているので、下級裁判所の裁判官であろう。
- ④紀元1世紀のパレスチナでは、金銭上の争いは、1人の裁判官が扱った。

(2) 旧約の律法では、裁判官（さばき司、長老、長）は神を恐れなければならない。

- ①彼の役割は、律法を破る者、弱者を搾取する者を裁くことである。
- ②彼は、弱者の権利を擁護する神の代理人である。
- ③このたとえ話に登場する裁判官は、それとは正反対の人物である。
 - *すべての行動の動機は、自分の利益である。
- ④聴衆は、「そういうのが、いるいる」と、ニヤッと笑ったはずである。
 - *今も、社会の頂点にいながら、自分の利益しか考えない指導者はいる。

(3) やもめの登場 (3 節)

- ①やもめは、裁判官とは対照的な人物である。
- ②旧約の律法では、やもめは抑圧された階層の代表である。
 - *収入の道は閉ざされていた。
 - *彼女は、裁判官に賄賂を支払うこともできない。
- ③このたとえ話では、やもめは寄る辺ないイスラエルの民の象徴である。

(4) 「彼のところにやって来ては、」(エルコマイ)の時制は、未完了形である。

- ①繰り返して来た。
- ②裁判官から見ると、しつこい女である。
- ③カナン人の女の例(マタ 15:22)

(5) 「私を訴える人を裁いて、私を守ってください」

- ①「エクディケオウ」は、正義を行う、ある人の権利を守るなどの意味。
- ②恐らく、不当な理由で土地か家を奪われそうになっていたのだろう。
- ③裁判官に正当な裁きを求めたが、聴衆は「むり、むり」と思ったはず。

2. 4～5節

Luk 18:4 この裁判官はしばらく取り合わなかったが、後になって心の中で考えた。『私は神をも恐れず、人を人とも思わないが、

Luk 18:5 このやもめは、うるさくて仕方がないから、彼女のために裁判をしてやることにしよう。そうでないと、ひっきりなしにやって来て、私は疲れ果ててしまう。』

(1) 予想外の展開が起こる。

- ①裁判官は、こういうケースは放置するのが常であった。
 - *自分の益にならないから。
 - *やもめが不当な仕打ちを受けているという事実は、彼を動かさなかった。

②裁判官の独白

- *「私は神を恐れず、人を人とも思わない」
- *「彼女のために裁判をしてやることにしよう」
- *「私は疲れ果ててしまう」
 - ・「ヒュポヒアゾウ」(目の下を打つ)(目に隈を作る)
 - ・肉体の傷ではなく、社会的評価のことである。

(2) 神がこの裁判官のようだというのではない。

- ①不正な裁判官でも、やもめの懇願によって行動を起こした。
- ②ましてや、恵み深い神が行動を起こさないはずがない。

Ⅲ. 適用 (6～8節)

1. 6～7節

Luk 18:6 主は言われた。「不正な裁判官が言っていることを聞きなさい。

Luk 18:7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わ

ないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。

(1) イエスは、価値ある真理を教えるために悪人の例を用いることがあった。

①不正な管理人のたとえ話（ルカ16：1～13）

(2) カル・バホメル（大から小へ）の議論

①不正な裁判官でも、やもめの執拗な願いに答える。

②ましてや、天の父はなおさら、信じる者たちの祈りを聞いてくださる。

③「選ばれた者たち」を厳密に解釈すると、患難期の少数のユダヤ人信者である。

④もちろん、神の助けがあるという真理は、どの時代の信者にも適用される。

⑤それゆえ、私たちが神の助けを求めて祈るべきである。

2. 8節

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

(1) 再臨を前提とした適用

①携挙ではなく再臨の時、神の敵は裁かれる。

②修辭的質問：「はたして地上に信仰がみられるでしょうか」

③これは、やもめが発揮したような信仰を持ちなさいという警告である。

④すでに神の国は成就しているという教えは、非聖書的である。

⑤試練の中でも、「御国を来たらせたまえ」と祈り続けることが信仰である。

結論：祈りの背後にある信仰

1. 天の父は良い方であるという信仰

(1) 懇願するやもめのたとえ話の視点

①「ましてや神は……」と考えるのは、正しい。

②「だから祈り続けるべきだ」と考えるのも、正しい。

③しかし、最も重要な視点は、「天の父は良い方である」というものである。

④天の父は、私たちの祈りを聞きたいと願っておられる。

(2) 祈りとは、唇の運動のことではない。

①それは、心の在り方のことである。

②父なる神への全面的な信頼がもたらす、心の在り方である。

2. 苦難の中にいる人たちを思いやる信仰

(1) この世界に住む弱い人たちのために祈る。

①自分の必要の枠を飛び越えた祈りである。

(2) この世界に広がる悪を阻止するために祈る。

①真実な祈りには、行動が伴う。

3. 再臨を待ち望む信仰

(1) すぐに祈りが聞かれない場合がある。

①その背後には、神だけが知っておられる理由がある。

②再臨を待ち望む信仰は、今を生きる力となる。

(2) 再臨の時に、あらゆる不義と不公平は、正される。

①すぐに祈りが聞かれなくても、継続した祈りを献げることができる。

(3) ロマ8:26

Rom 8:26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。

①ことばにならなくても、祈りは父なる神に届いている。

ルカの福音書 80回
パリサイ人と取税人のたとえ話
18：9～17

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカは、エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

*ルカ 9：51～19：27

②ルカ 18：9～19：27 は、「エルサレムへの旅」の結論部分である。

③ルカ 18：8

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

④ルカは、「地上に信仰が見られるでしょうか」というテーマを展開する。

*救いは、恵みと信仰による。

*ルカの強調点は、救われるのはどういう人かという点にある。

(2) ルカ 18：9～19：27 の内容

①パリサイ人と取税人のたとえ話（18：9～14）

②謙遜に関する教え（18：15～17）

③富の弊害（18：18～30）

④受難の予告（18：31～34）

⑤盲人の癒やし（18：35～43）

⑥ザアカイの救い（19：1～10）

⑦ミナのたとえ話（19：11～27）

2. アウトライン

(1) 序文（9節）

(2) 内容（10～13節）

(3) 適用（14節）

(4) 謙遜に関する教え（15～17節）

3. 結論：3種類の人

パリサイ人と取税人のたとえ話について学ぶ。

I. 序文（9節）

1. 9節

Luk 18:9 **自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。**

- (1) イエスは、自分を義人だと自認している人たちに語った。
 - ①パリサイ人たちは、イエスの福音を信じようとはしなかった。
 - ②彼らの特徴は、自己義認である。
 - ③自己義認を特徴とする人は、自分と他者を比較し、優越感を持つ。
 - ④このたとえ話の目的は、彼らを辱めるためではなく、助けるためである。

II. 内容 (10～13節)

1. 10節

Luk 18:10 **「二人の人が祈るために宮に上って行った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。**

- (1) パリサイ人と取税人の対比 (10節)
 - ①パリサイ人は、ユダヤ人共同体の中で、最も敬虔だと思われていた人である。
 - *彼らは、一般論として、イエスとイエスが語る福音を拒否した。
 - ②取税人は、売国奴として最も軽蔑されていた人である。
 - *彼らは、一般論として、イエスの招きに積極的に応答した。
 - ③宗教的階層から見ると、最高の人と最低の人が祈るために宮に上ったのである。
 - *前者は義の象徴であり、後者は不義の象徴である。
- (2) 祈りの場所は、伝統的に神殿である。
 - ①エルサレム近郊に住む人たちは、祈るために神殿に上った。
 - ②神殿は丘の上に建っていたので、そこへは「上って行く」である。

2. 11～12節

Luk 18:11 **パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようにでないことを感謝します。**

Luk 18:12 **私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。』**

- (1) パリサイ人の祈りは、祈りではなく自慢である。
 - ①彼は、他人との比較を基準に祈っている。
 - ②「私」という一人称の代名詞を多用している。

(2) 道徳的な自慢

- ①奪い取る者、不正な者、姦淫する者ではない。
- ②この取税人のようではない。

(3) 宗教的な自慢

- ①週に2度の断食。(木)と(月)に水も飲まない断食をしていた。
 - *モーセは木曜日に、シナイ山に上ったと信じていた。
 - *モーセは月曜日に、2度目の律法を受けて山を下ったと信じていた。
- ②十分の一を献げている。
- ③すべて完璧である。

3. 13節

Luk 18:13 一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』

(1) 取税人の祈り

- ①「一方」ということばは、明確な対比を示す。
 - *「遠く離れて立ち」は、パリサイ人との対比を示す。
- ②彼は、目を天に向けようとしなかった。
 - *しかし両手と目を天に向かって上げるのが、普通の祈りの姿勢である。
 - *自分にそのような価値があるとは思わなかった。
- ③自分の胸をたたくのは、悲しみの表現である。

(2) 「神様、罪人の私をあわれんでください」

- ①彼は、神の基準に基づいて祈っている。
- ②彼は、神に向って祈っている。
- ③彼は、神の恵みによってのみ自分は救われると信じている。
- ④当時の認識では、パリサイ人の祈りは合格で、取税人の祈りは失格である。

III. 適用 (14節)

1. 14節

Luk 18:14 あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

(1) イエスは、当時の認識を逆転させた。

- ①聖書には、高慢な者は低くされ、低くする者は高くされるという原則がある。

②義と認められたのは、パリサイ人ではなく取税人である。

(2) パリサイ人の祈り

①他の人たちとの比較に基づく祈りである。

②自分の罪は見えないが、他人の罪はよく見えるという祈りである。

③神に届かない、独白のことばである。

(3) 取税人の祈り

①神の基準に基づく祈りである。

②自分の罪に焦点を合わせた祈りである。

③自分に誇れる点は何もないという認識から出た祈りである。

④神に届くことばである。

IV. 謙遜に関する教え（15～17節）

1. 15節

Luk 18:15 さて、イエスに触れていただこうと、人々は幼子たちまで連れて来た。ところが、弟子たちはそれを見て叱った。

(1) 神の救いを受けるためには、謙遜が必要である。

①ルカは、その実例として、このエピソードを紹介している。

②パリサイ人と取税人のたとえ話と内容はつながっている。

(2) 幼子をラビのもとに連れて来るのは、ユダヤ人の習慣であった。

①弟子たちは、幼子を連れて来た親たちを叱った。

②イエスにはもっと重要な使命があると考えたのであろう。

2. 16～17節

Luk 18:16 しかし、イエスは幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」

Luk 18:17 まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」

(1) イエスの応答

①イエスは、弟子たちの誤りを正した。

②イエスは、幼子を連れて来るように親たちを励ました。

- (2) イエスは幼子に深い関心を払われた。
 - ①幼子は、神の国に入るために必要な謙遜の実例を示している。
 - ②幼子の特徴は、他者に依存しないと生きていけないという点にある。
 - ③幼子は、与えるよりも受けることによって生存している。
 - ④そういう意味で、幼子は謙遜の実例となっている。

- (3) 幼子のこの性質を持っていないなら、神の国に入ることはできない。
 - ①自力救済は不可能であるという認識
 - ②神の赦しを受け取る信仰

結論：3種類の人

1. 未信者

- (1) 神に対して幼子の心を持つことができない人たち
 - ①自力救済を模索している人たち
 - ②救いは、恵みと信仰によることを理解できない人たち
- (2) エペ2：8～9

Eph 2:8 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。

Eph 2:9 行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。

2. 自己義認の性質を残している信者

- (1) 信仰義認を知っており、救われている人たち
 - ①しかし、依然として自己義認の性質が顔を出す人たち
- (2) 自己義認の危険性
 - ①プライドを生み出す。
 - ②感謝の心を奪う。
 - *感謝は、贈り物（恵み）を受けたときに生まれる感情である。
 - *自分は、その贈り物を受けるに値しないという認識が根底にある。
 - ③他の人たちを軽蔑するようになる。
 - *他の人たちとの比較が、義の判断の基準となる。
 - ④神の教えを学ばなくなる。
 - *自己充足している。
 - *神に信頼しなくてもよくなる。

3. 幼子の心を持っている信者

(1) 霊的に成長した人たち

①自分が無力であることを認識している。

②神の恵みに信頼を置いている。

(2) 神との和解の方法を知っている人たち

①詩 51：16～17

Psa 51:16 まことに 私が供えても／あなたはいけにえを喜ばれず／全焼のささげ物を望まれません。

Psa 51:17 神へのいけにえは 砕かれた霊。／打たれ 砕かれた心。／神よ あなたはそれを蔑まれません。